連載

京都工芸繊維大学 産学公連携を基軸とした イノベーションの誘因 Innovation by Design

地域創生と産学公連携プロジェクト ⑥

京都工芸繊維大学 理事・副学長（研究・産学地域連携担当） 吉本 昌広
デザイン・建築学系 教授 清水 重敦 准教授 岩本 馨 講師 赤松加寿江

京都府北部における地域創生

京都工芸繊維大学は、国立大学としての第三期中期目標期間における三つの重点支援枠組みのうち、「地域のニーズに応える人材育成・研究を推進」を選択し、『地域から世界を見据えた人材育成機能強化』をテーマにして、教育・研究に関わる産学・地域連携の取組みを進めている。

COC事業に続いて、平成二十七年度に採択されたCOC＋事業においては、京都府内で特に人口流出が進む北部の地域創生を担う人材を育成することを目的としており、事業の中核として位置づけている「地域創生Tech Program」は、一般枠とは別に京都府北部の高等学校卒業生等を優先的に受け入れる地域入学枠を設け、地域貢献意欲のある学生を集めている。

同プログラムでは、京都市内の松ヶ崎キャンパスで語学力・教養力・専門基礎力を身につけた後、新たに設置した福知山キャンパスにおいて必修科目である地域課題PBLや地元企業でのインターンシップに取り組み、その後、海外インターンシップを体験させることで、「地域TECH LEADER」（地域貢献意欲を有した国際的に活躍できる理工系高度専門技術者）人材を輩出したいと考えている。

地域課題PBLでは、地元企業等から課題の提供を受け、専攻の異なる学生が意見を出し合い、フィールド調査やプロトタイプの作成に取り組んだ。実装化に向けた具体例としては、学生がデザインしたベンチをJR福知山駅構内に設置することや、学生がパッケージデザインした商品を京丹後市福祉事務所が販売することが計画されている。また、大学が独自に開発したマッチング・モニタリングWebシステムを活用し、学生の希望に応じた地元企業でのインターンシップ（学生二二名が延べ四一件）を実施した。

地域密着型大学としての機能をさらに発展させ、地域のニーズに応じた様々なプロジェクトを展開することで、地域の活性化に貢献していきたいと考えている。

文化遺産の保存再生

京都工芸繊維大学の研究リソースを生かして、建築・都市遺産の保存、再生、活用に積極的に関与し、建築・都市遺産からの地域再生に貢献している。既往の建築学の中では文化財としての歴史的建造物や都市に限定した調査研究と実践が進められる傾向があったが、人口減少やストック型社会への転換といった近年の社会状況ゆえに既存環境全体の再生と活用が一層重視されることになることを見込み、京都工芸繊維大学ではいち早く、対象をより広く「建築リソース」と捉えてその調査から保存活用までをにらんだ大学院の特別教育コースを立ち上げた。このコースの成果を元に、平成二十七年度より「建築・都市保存再生コース」を開始し、主に近現代建築を対象にその保存再生の教育をするとともに、公開の特別講義やシンポジウムを開催し、保存再生に関わる情報拠点形成に努めている。一定の教育効果が上がったこと、そしてこのコースの社会的役割についての認知度が上がってきたことから、平成三十一年度後半よりこのコースを改組して社会人を対象とするリカレント教育を開始すべく準備を進めている。

また、文化財への貢献も引き続き進めている。平成三十一年の文化財保護法の改正に伴い、文化財を生かした地域づくりが一層求められるようになり、また文化庁の京都移転も決まりこの分野で京都工芸繊維大学が果たす役割も拡大すべき時期に来ているものと考え、上記のコース運営と連携しながら都市、建築に関する文化財の調査研究とその保存活用への関与を深めている。近年は建築史、都市史分野の教員が充実していることを生かして、より複合的な視野、分析、マネージメントが求められる世界遺産を対象に、その登録に向けた調査研究、そして既登録の世界遺産のマネージメントへの貢献を組織的に行うべく、実践の場を拡大している。

錦市場プロジェクト

錦市場商店街は「京の台所」として知られる食品市場である。四〇〇年来の歴史を誇るこの市場のブランド価値は広く知られ、国内のみならず海外からの旅行者を惹き付けるにいたっている。

京都工芸繊維大学KYOTO Design Lab（以下D―lab）では、平成二十七年度、平成二十八年度にスイスから建築家のM・ヘルツ氏とS・ラーバラン両氏を招聘し、錦市場をフィールドとした学生参加によるワークショップを開催した。初年度はまず、食文化の背景となる京都の歴史と地理について調べ、また実際に錦市場の店舗を訪れて聞き取りを行い、空間実測も実施した。二年目はこの基礎的リサーチをふまえ、これからの市場空間について、具体的な敷地を設定した上で建築的・デザイン的提案を行った。

この二年間のワークショップを進めるなかで、ブランド化して安泰なように見えた錦市場が、急速な観光化によって、店舗と顧客双方の構造転換が進み、その足元が脅かされていることがわかってきた。市場側もこの問題について危機意識を持っていることがわかり、そこで錦市場商店街振興組合とD―labと共同研究として「錦まちづくりプロジェクト」が平成二十九年九月に開始され、錦市場のブランディングにともに取り組んでいくことになったのである。

プロジェクトではまず喫緊の課題として食べ歩き問題の抑制が課題となった。D―lab ではそのための提案として、食べ歩き禁止を伝える掲示物と、視認性と意匠性に優れたゴミ箱のデザインを行った。また市場のブランディングのキーワードとして「二十四節気」（※今後は季節感とともにあった京都の食という基本をふまえた、市場と人々の新たな関係性のデザインに取り組んでいこうとしている。

西陣プロジェクト

「西陣」といえば高級織物の生産地として知られ、京都の華やかな伝統工芸を支えてきた地である。しかし現在の西陣は、住民減少、産業衰退が著しく、多くの観光客で賑わう京都において魅力的な観光スポットとして西陣が上位にあがることは少ない。地域の経済的、社会的担い手を喪失し、観光化にも課題を抱える西陣地域を対象に、地域の魅力を再発見し、地域ブランディングを行うことを目的に開始されたのがこの西陣プロジェクトである。

平成二十九年度は九名の学生が西陣地域を多角的に調査研究した。「西陣の歴史」「紫野の空間構造」「西陣の寺社」「西陣織」「織機と図案」「分業と町家」「銭湯」「娯楽」といった八つの切り口で地域調査を行い、成果は書籍としてビュジュアル化し、新たな西陣の魅力を浮かび上がらせた。

平成三十年度は西陣地域と不可分な「今宮祭」を対象に、二四名の学生が地域課題に取り組んだ。起源は十世紀に遡ることができる今宮祭だが、祭を支える鉾町住民が年々減少し、祭への参加意識も低下している。現状に苦慮する今宮神社の依頼のもと、学生たちが七つの鉾町に密着取材を行い、祭の巡行に参加することで、課題の発見、解決を目指した。具体的な解決の試みは平成三十一年度に引き継がれるが、学生の研究報告会という場は、鉾町同士の横の連携を作る契機となり、調査の成果本は「今宮祭」の歴史と現実を明らかにするものとなっている。

そもそも京都工芸繊維大学は西陣織の繊維と図案の人材育成のために作られた教育機関であり、両者は深い由縁をもっている。建学以来「科学」と「芸術」の融合を目指してきた京都工芸繊維大学が、開学一二〇年の時間を経た今、西陣の地域課題の解決に取り組むことは運命的なものといえるかもしれない。